

0. 文語文の読み方

読み慣れないので難しいが、主張は明確で単純である。細かいところがわからなくても、「何が言いたいのか」を意識して読めば、結局すべて1つの主張を繰り返しているにすぎないことに気づけるはず。

- * ~べからず ⇒ ~できない
- * ~せざるべからず ⇒ ~しなければならない

1. 今、私たちが『文明論之概略』を読む意味

資料（子安宣邦『福沢諭吉『文明論之概略』精読』序）参照。

2. 福沢が本書で一貫して主張したいことは、「日本は文明化しなければならない」ということ。

日本にとっての緊急の課題は、日本が文明化することである。そこで、なぜ文明という課題が今の日本にとって重要であるのかをこの『文明論之概略』で示し、人々にその重要さの理解を促していこうとする。

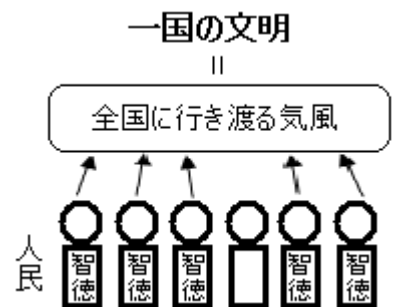
卷之二

第四章：一国人民の智徳を論ず

※ 智徳：智恵と徳義のこと（詳しくは巻之三で。）

ある国が文明的であるかどうかは何によって判断できるだろうか。

P75 「全国に行わるる気風」を見ればわかる。
P76 一国の人民が持っている智徳から現れる。



一国人民の智徳が重要な理由

P86- これによって、世の治乱興廃が決まってくるから。二人三人の人が国政を取って、人々の心を動かそう
89 としても、決してできない。偉大なことを成し遂げるには、智徳の進歩の状態が、二人三人のもつ能力を妨げない必要がある。

- ◆時勢（当時の人の気風、人民の智徳の有様）に合って成功した例：
豊臣秀吉、アメリカを独立させたワシントン、ナポレオンに勝利したビスマルク
- ◆時勢に合わず失敗した例：孔子や孟子、楠正成

人民の気風があるかどうかは、どうやって見ればよいのか。

P80 一事一物を見るのではなく、天下の民衆の心を一体にみなして、長い時間のスケールをもって比較し、
P83 その事実の跡として現れるものを観察すればよい。（統計学）

P81 例）自分の学校の周りの明日やあさっての天気を正確に予測することができなくても、日本全国で一年に降る雨量を調べれば、「晴れの日より雨の日が多い」という傾向がわかる。

P82 例）人々はいつでもどこでどのくらいお菓子をを買うかは答えられないように、一人について菓子を買う人の心を見ることはできないけれども、市中の人々を一体にして考えると、これを食べる心の働きは必ず一定の規則があって、その進退を予測しうるので、売れ残ることがないのである。

P84 この方針にしたがって物事を詮索すると、その事象の原因を求めるときに非常に便利。
しかし、このとき、なるべく遠因を追究しなければならない。

P85 例) たとえば、水を沸騰させるものは薪の火であり、人の呼吸を可能にさせるものは空気である。しかしながら、これは近因であって、一歩進めると、その遠因は「酸素」であることがわかる。沸騰の働きと呼吸の働きが、同一の原因であることが分かって、初めて確実な議論を定めることができる。

例) 人が結婚するかしないかも、近因は当人の意向、親の命令など諸所の都合であるが、これだけでは事情を明らかにするに足りないだけでなく、かえって混乱や複雑を起こして人を惑わすことがある。だから、一歩進んで穀物の価格という真の原因を突き止めて、「穀物の価格が高ければ婚姻が少ない」という確実な規則を得ることができる。

P86 耳や目に聞いたり見たりする近いところに惑溺して、遠因を求めることを知らず、これに欺かれあれに覆われ、みだりに発言し思いのままに重大な事柄を行おうとして、暗闇の中で棒を振り回しているようなまねは、「本人を思えば憐むべし、世の為を思えば恐るべし。」

福沢が言いたかったこと

P97-98 政府の行うことがうまくいかないのは、二、三人の官員の罪ではなく、衆論の罪なのである。世の中の人は、誤って官員の処置を咎めてはいけない。昔の人は、まず君子の非を正すことが必要不可欠であるとしたけれども、福沢の説はこれに異なる。天下の急務は、まず衆論の非を正すことにあるのである。

P99 ※ かといって、政府や学者が役に立たないというわけではなく、それぞれの役割で文明の一端を担うものである。政府は、その事に対して即座に判断し可否を決し実行できるようにする。学者は、普段からよく世の中の形勢を観察して将来の用意をし、その事を実現に向かわせたり防いだりする。政府の動きは外科のようで、学者の論説は養生の方法のようなものである。ただお互いにその動きを妨げずに助け合い、文明の進歩に少しでも障害がないようにしなければならない。

第五章：前論の続

主張①衆論の強弱は数ではなく、智力の分量によって決まる。

P110 古風家と改革家だと、人数のうえで言えば 7-8 : 3-2 であるが、智力はその逆で、古風家<改革家であつたために、幕末の改革が行われるに至った。改革の乱を好む者は概して、智力があつて銭がない人である。したがって、文明を進歩させるためには、人と交際するときには、みんなこの智力のあるところを目的として対処しなければならない。愚かなものの非難や賞賛を基準にして物事を進めてはいけない。政府は、時に人民に洒肴を与えるけれども、人からもらったものを飲食して喜び人は、飢えている人でなければ愚民である。また、その愚民が喜びのを見て喜び人は、その愚民に等しい愚者である。

主張②一人ひとりに智力があつても、習慣によってそれを結合させなければ衆論の体裁は成さない

P113 日本では、人民一人ひとりには決して愚かではないのに、会社が大きくなるごとに、不始末が目立ってくるケースが多い。政府も、智力のある人が集まっていることはたしかなのだけれども、その処置は必ず

しも智とはいえない。日本人は、仲間が集まって事を行うにあたり、一人ひとりの持ち前の智力に比べて、不似合いな拙を尽くしてしまいがちだ。

P114 対して西洋では、仲間が加わるとさらに議論が勇気づけられ、一人ひとりの才智よりもさらに高尚な衆論が行われている。この原因はといえば、ただ「習慣」につきる。知らず知らずに事を成しているのである。

P116
-118 議論を始めるには、人民に智力がついておのずから発生するのを待たなければならないという学者もいるけれども、そうではない。「議論をしない習慣」を変えなければならないのだ。政府が人民の言論を制限することはあってはならないが、当事者からさっぱり議論が出てこないのもいかなものか。土民の愚かさは、政府の専制にとっては都合がいい。しかし、いまや諸外国と交渉・交通を通じてのみ自国の存立も発展もある時代である。今のままの人民に頼って外国と交際するにはおぼつかないものがある。議論をする活力がないのは、生まれつきの欠点なのではなく、習慣によって失ったものなので、これを回復する方法も、また習慣によらなければ達成できない。習慣を変えることが大切なのである。

卷之三

第六章：智徳の弁

この章では、智と徳についてそれぞれ具体的に述べる。

智と徳の定義と種類

- 智（智慧）：インテレクト。物事を把握し、考え、理解する能力。
- 徳（徳義）：モラル。人の見ていない所でも恥ずかしいことをしないような、心の行儀。

これをさらに「私」と「公」に分ち、4分類する。

	私	公	
智	私智（小智）	公智（大智）	←最も重要
徳	私徳	公徳	

P120 例）一身上のことはうまく処理しても、周りの勢いに流されてしまうような人は、「私智があって公智がない」。大事業を成功させていても、人柄の評判が悪いような人は、「公智があって私徳に乏しい」。

智恵と徳義の性質の違い ※ P16202-8 にまとめ

P128 [1] 徳義とは、内の働きである。一人の心の内で働くものである。
智恵とは、外の働きである。外のものに接して臨機応変の処置を施すものである。

P129 [2] 徳義の効用は、一家の中には及ぶ。両親が正直で温厚であれば、子供も自然にそうなる。
智恵の効用は、一度発明してこれを人に伝えれば、全世界を変えることもある。
ワットとスミスがその代表例である。

P132 [3] 徳儀は、昔から定まっています。動かないものである。キリストの教え、孔子の教えは、今でも誰も改定しない。聖人が「雪は白い」と言って、後の人はこれをどうすることもできないようなものである。だから、徳義のことは、後世に至っても進歩はしない。

P133 智恵は、発明があるごとに、教えの箇条が増え、そのため進歩も絶え間ない。

P134 [4] 徳儀は、形がない。したがって、教えることはできない。ただ反復して説得する以外に伝える方法がない。あとは、読書をするなり、今の人の言行を見聞きするなど、一人ひとりの心の工夫に頼るしかない。

P136 智恵には、形がある。一度発明した「加減乗除の術」や、「水を沸騰させれば蒸気になる」といった知識は、形をもって教えられるし、これを形にして試験をして、能力を糾すこともできる。だから、「偽智者」といったものはない。

P139 [5] 徳儀は、人の心の工夫によって、進退するものである。徳のある田舎者が都会に出て放蕩無頼に陥ることもあれば、極悪人が改心して仏門に入ることもある。

P141 智恵は、教え、学ばなければ進まないが、すでに進んだものが退くことはない。昨年一生懸命勉強した人が、今年は遊びほうけていたとしても、その人がすでに得た知識というのは物忘れしやすい性質でなければ失うことがない。

智恵と徳義は両方備えていなければならない

P122 世の中の人には、「徳」の意味を狭く捉えがちで、英雄豪傑を賞賛するときにも、「私徳」の方しか見ない。たしかに、未開の国においては、まず一人ひとりの粗野であり残酷である拳動を制御して、心を穏やかにさせなければならないので、「私徳」の教えが強調される。「私徳」は、時代や国を超えて通用する、P123 変わらない、普遍的なものである。そして、最も単一にして最も美であるものなので、後の時代にこれをP124 改正することはしてはいけない。しかし、世の中の変革にしたがって、これを用いる場所を選び、用P126 いる方法も工夫しなければならない。私徳一方を修めても、文明の進歩にしたがって増える多様な人事を扱いきることはできない。私徳を無用だとして捨てるのではなく、人間の事務に対処するのに、智徳が大切であることを示したい。

なぜ智恵が大切なのか

文明を進歩させるのは、徳義ではなく智恵だからである。

P142 「一身の徳を修めなければ何事も成し遂げることができないので、まず徳義を修めてから、そのあとに物事を計画すべきである、西洋の文明もアジアの半開も、どの程度深く徳義を修めているかどうか原因がある」と説く人がいる。しかし、善人が必ず善をなすわけではないし、悪人が必ず悪をなすわけではない。たとえば、宗教の教えをもって戦争が起こった例は、歴史を見ればいくらでもある。そこから殺戮が減ったのは、人が智恵をつけたからである。人の智恵は、徳義を保護して悪を免れさせるのである。P159 私徳は、自分の身を修めるものであって、他人のためにするためのものではない。徳義で文明に利益をもたらしたとしても、それは偶然のきれいごとである。P163

P152 **なぜ智恵の重要性を説くのか**
今日日本の人民に足りないものは智恵の方であるから。文明は、一国人民の智徳を外にあらわした現象であることは巻之二で述べたとおりである。今、日本がいまだに文明に達していないのは、その人民の智徳が不足するところに原因があるので、この文明を達成しようとするには、智恵と徳義を求めなければならない。この二つのうち、「日本人は、徳義は不足しているけれども智徳は余りある」という人はいるまい。日本人には智徳が不足しているのである。

P164 **私徳を備えているだけで十分ではない**
人としてこの世に生まれたからには、自分の身を始末できるようになっただけでは、職分を全うしたとはいえない。だから、肉体の便利もすでに豊かで、一身の私徳に恥じることがないといっても、今の有様にとどまって安んじてはならない。その豊かさや、恥じる事のないということは、今日の文明にとっては事足りるかもしれないが、まだ文明の極致に至ってはいないのである。人の精神が発達することに限界はなく、万物の仕掛けに一定の法則がないものはない。だから、無限の精神でそれらの法則の筋道を深く研究し、万物をすべて人の精神の中に包み込んで漏らすものがないところに至るだろう。ここに至れば、智徳の区別を論じてその境を争いも取るに足りない。必ずこのような日が来るはずだ。

問題提起

第四章

※ 「衆論は数より智の量」という命題は、本当に成り立ちうるのだろうか。

第五章

※ 「議論を活発にすべし」という主張には納得できる。日本人には「議論をしない習慣」というのがあるが、多様化が尊重され、共通言語を失ってきた時代において、言葉に表し議論をすることはますます重要なことになっていると思う。争いを避けるために議論の場を消去してしまうのは、ある意味で賢い方法だが、それで良いのかというと、疑問の余地は残るだろう。

第六章

※ 「智恵の不足を補わなければならない」という議論は、直感的には共感できるが、論理的に説得力が感じられなかった。先月「ホップズの恐怖の状況」でもやったように、人間の理性が状況をより良くするには限らない。智恵をつければ必ずいい方向に進むと言えるゆえんは何か。

※ ただ、進歩がいいかどうかはともかく、向上心は持たなければいけないと思う。

※ 智徳を国民に備えさせるにはどうしたらいいのか。たしかに、今の人民は、世の中のことをまともに考えていないし、そのことが状況をより悪くしているように感じる。だから、もっと学問をさせ、智恵をつけ、政府に頼らず自ら事を成していかなければならない独立の精神を持たせなければいけないという議論にもうなずける。しかし、それを自分がどうしようとしたところで、何もできないのではないか。福沢は、「衆論を正す」という急務を遂行するために、「教育」という課題に取り組もうとしたようだが、結局、智恵を教えるにも、本人の学ぶ意欲や素直さがなければならぬので、多かれ早かれ徳義と同じように一個人の問題に行き着いてしまうように思う。

巻之一 補足

疑問点・問題提起に対する個人的な意見を考えてみました。

◆文明と文化の違い（『大辞泉』より）

「文化」は民族や社会の風習・伝統・思考方法・価値観などの総称で、世代を通じて伝承されていくものを意味する。「文明」は人間の知恵が進み、技術が進歩して、生活が便利に快適になる面に重点がある。

⇒「文化」と「文明」の使い分けは、「文化」が各時代にわたって広範囲で、精神的所産を重視しているのに対し、「文明」は時代・地域とも限定され、経済・技術の進歩に重きを置くというのが一応の目安である。「中国文化」というと古代から現代までだが、「黄河文明」というと古代に黄河流域に発達した文化に限られる。「西洋文化」は古代から現代にいたるヨーロッパ文化をいうが、「西洋文明」は特に西洋近代の機械文明に限っていうことがある。

◆「文明化した」段階とは、どのようなものか

わかりませんが、P164 後ろから 4 行目～5 行目がヒントになるのでは。

◆第一章で福沢が主張したかったことについて

「本位」とは、辞書的な意味でいうと、「判断や行動をするときの基本となるもの」。

なので、議論の本位とは、「議論を進め、結論を探していく際に本質的に必要な、共通の了解。」であって、第一章では、議論をするための交通整備をしているといえるのではないか。

つまり、ただただ目的もなく自分の意見を主張しあっていたら、議論も不毛に終わってしまうので、そうならないように、「何のために」「どのような態度・姿勢で」議論を進めるのかを最初にお互いに了解しあわなければならない、ということが言いたかったのでは。

